

学部連携学習 学部を超えて共に学ぶ

保健医療学部看護学科 正儀原 佑菜 (岐阜県立部上高等学校出身)

昭和大学のアカデミックスキルズやヒューマンコミュニケーションの授業では、医療系の学部の垣根を越えたグループで学ぶ「学部連携学習」が行われています。



グループ学習を行うため、マスク使用はもちろん、フェイスシールドの着用、手や机や椅子などの消毒、換気、朝夜2回の検温などの感染対策を徹底しました。そうすることで、コロナ禍であってもグループでのコミュニケーション学習やディスカッションなどの学びを実現することができました。

例えば各学部の学生が混在するグループで、コミュニケーションに関する国家試験問題を解きながら意見を交換する学びや、接触や表情を使って人と距離が縮まることを実際に体験するという学習がありました。このような授業を通して、共にチーム医療を行う間の信頼関係を築く、そして心の距離を縮めるという人間関係構築において必要な力や、相手の意見を理解し、自分の意見が相手に伝わるようにわかりやすい言葉で説明するといった力を楽しみながら実践的に身につけることができました。

このようにコロナ禍であっても学部の垣根を越えた実践的なコミュニケーションの学びができることに感謝し、このような学びから自分自身を成長させ、よりよい医療従事者になりたいと感じました。

BLS 救える命を救うために

保健医療学部作業療法学科 DANGOL TISA (ゲンゴロ ティサ) (東京成徳大学高等学校出身)

皆さんは人が急に倒れてしまった時、何をすることができますか。そのような場面に遭遇した時、BLSの正しい知識と適切な処置の仕方を知ること、私たちが救うことのできる命があります。BLSはBasic Life Supportの略称で、心肺停止または呼吸停止に対する一次救命処置を意味します。今回のBLS講習では倒れている人を発見した場合に、救急隊や医師が到着するまでに行う対応を学びました。

私は中学生のときに一度、BLSが必要な場面に遭遇したことがあります。中学校でもBLS講習を受けたことがありますが、実際にそのような場面に遭遇すると恐怖や焦りて何もすることができませんでした。このような経験から、周囲が混乱している中でも倒れた人に対して冷静に適切な処置を行うためには、知識だけではなく繰り返し練習し、しっかりと身体で技術を覚えることがとても大切だと思いました。

今回のBLS講習では少人数のグループに分かれ、協力者と声の掛け合いをしながら一連の動作を繰り返し行うことで、知識や技術をしっかりと身につけることができました。今回学んだことを今後に活かし、倒れている傷病者を見つけた時にまずから率先して一次救命処置を行えるようになりたいと思います。

担当教員より 富士吉田教育部 准教授 弓桁 亮介

本講習は、蘇生人形及び手指のアルコール消毒の徹底、十分な換気、人工呼吸の吹き込みをしないなど、新型コロナウイルスへの感染対策を講じたうえで実施したものです。

実習 実習で感じた感染対策の重要性

薬学部薬学科 村上 真悠 (宮城県仙台第二高等学校出身)

一年生の医学部・歯学部・薬学部の3学部は、毎週水曜日の午後基礎サイエンス実習という授業が割り当てられています。この授業は、それぞれの学部が必要としている能力を実習という形で修得するためにあります。私たちが薬学部には薬学部の実習カリキュラムがあり、その中のひとつにバイタルサインを測定するというものがありました。

この実習ではたくさんの測定機器を扱いました。また、台数の問題で二人で一つの機器を扱わなければならない場面がありました。しかし私たちは、実習前の手洗い・アルコール消毒の徹底、フェイスシールドの着用、使用する機器は自分が使う前に必ずアルコール除菌することなどを通して感染対策に取り組みました。これらを徹底することで、コロナ禍では難しいと言われる対面での実習をしっかり行うことができました。

こうした対面での実習の魅力は、自分で機器を操作してみないと分からない気づきを得られることや、血圧を測るときに聞こえるコロトコ音を実際に聞くことができるなど、実感を伴った理解ができる点にあると思います。これらは遠隔授業や説明を聞くだけでは得ることができないものばかりであり、私たちの感染対策が学習や実習に活かされている点であると言えるのではないかと思います。



PBL 学部の垣根を越えて

歯学部歯学科 細谷 崇人 (鎌倉学園高等学校出身)

4学部6学科が連携し、1グループ8~9人でチームを作り、チーム医療を視野に入れたPBL(問題解決型学習)が授業の一環として行われました。PBLは二つのコアタイムに分かれていて、コアタイム1では与えられたシナリオからグループ全員で問題や課題を見つ出し、疑問点を明確にし、問題を解決するための学習項目を設定します。コアタイム2では、自分たちで設定した学習項目を各自で調べ、その内容をグループ内で発表し、共有および問題解決のために討論を重ね、問題を解決します。

最初は、慣れない講義の形式や、初対面の人ばかりのチームに、どうすればいいのか戸惑うことも多くありました。しかし、同じ問題や課題について意見を交わし、解決に向かっていく中で、次第にチームに一体感が生まれ、やりがいのある授業だと感じようになっていきました。また、医系総合大学である昭和大学ならではの学部の垣根を越えたPBLは、歯学部で学習しているだけでは得ることができなかったかもしれない様々な視点からの考えや意見に刺激を受けるきっかけを与えてくれました。

このような経験を通して、医療人としての自覚やチーム医療の大切さを学ぶことができました。



担当教員より 富士吉田教育部 准教授 弓桁 亮介



実行委員長挨拶 新組織・新体制による体育祭開催!

2021年度寮察実行委員長を務めさせていただいております、有村優希です。

今年度は、これまでの組織形態を縮小し、イベント、会計、広報/アルバム、後夜祭、校内装飾、コロナ対策/食飯、前/中夜祭、体育祭、物品の9つの部門によって委員会活動を行っております。学生が楽しいと思える寮察「創り」への全力の取り組みはもちろんのこと、新型コロナウイルス感染予防対策に重きを置いた安心・安全の企画および運営を実施しています。

今年度はまず体育祭のみを6月26日開催し、無事に終えることができました。それ以外の寮察は、感染状況に鑑み秋に延期となりました。未曾有の災禍の中、体育祭に賛同してくださった先生方、参加してくださった学生の皆さん、本当にありがとうございました。この場を借りて感謝申し上げます。秋に延期された寮察もまたご協力のほど、よろしくお願い致します。

体育祭部門長 4色対抗で一致団結!

医学部医学科 染谷 康貴 (聖光学院高等学校出身)

6月26日(土)、前期最大のイベントである体育祭が行われ、部門長を務めました。先生方のご指導のもとで体育祭を開催することができたのは毎日2回の検温の提出、自主的なマスクの着用と手指消毒を行った学生たち全員の努力と協力が大きかったと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、パンデミック以前と同じような体育祭はできなかったかもしれません。しかし、学生が楽しめる要素をこれまで以上にふんだんに盛り込んだ体育祭を行うことができたと思っています。例えば、4つの学部で構成されているコンパ(学生20人前後からなる指導担任ごとのグループの通称)の特色を活かして体育祭限定のコンパオリ



赤:カラー長 開催年の体育祭は赤一色!

医学部医学科 白井 萌奈 (桐光学園高等学校出身)

6月26日体育祭当日は、梅雨のどんよりとした連日の曇り空がまるで嘘だったかのように青空と緑が広がり、まぶしい太陽が私たちを照らし、4色に燃え上がるエネルギーがグラウンドに渦巻いていました。

直前のスケジュール変更により色ごとの集合や打合せがほとんどできないままに当日を迎えたため、どのような体育祭になるのかがつかめず、正直少し不安にも思っていました。ところが、そんな不安とは全く裏腹に当日はかなり熱く盛り上がりました。

赤組カラー長として、仲間が競技に真剣に取り組む、楽しみ、応援し、また勝った時には全力で喜んでる姿を見るのができたことが、何よりも嬉しかったです。最後の色対抗リレーが始まる前、赤組はリレー選手が内側、外側にはそれ以外の全員で三重の円陣を組み、優勝に向けて一斉に歓声をあげた後、全員でリレー選手をハイタッチのエールで送り出しました。その色対抗リレーで赤組アンカーが一位でゴールした瞬間、私と副カラー長を先頭に赤組全員が無我夢中でトラック内のメンバーに駆け寄り、ジャンプしながら一緒に喜びを表した時、赤組が1つになったと実感しました。あの時の高揚と感動は今でも忘れられません。人生最後の体育祭、真っ赤な最高の思い出です。



黄:カラー長 思い出がまた一つ

歯学部歯学科 福村 知哉 (星陵高等学校出身)

富士吉田キャンパスでの体育祭は、一生の思い出になりました。感染症予防の観点から体育祭の開催の見直しは不透明なものとなっていました。しかし、医系総合大学である昭和大学とその学生の徹底した感染予防対策により、開催することができました。入寮時とその2週間後に行う2回のPCR検査から始まり、毎日の検温による学生の自己管理、3密の状態を極力なくすなどの対策を行い、入学からの三ヶ月余り一人の感染者も出さずに体育祭を迎えることができました。私は黄色のカラー長として、感染症予防を考慮しつつ回員を盛り上げました。一ヶ月以上の月日がたった今でも、昨日のことのように最高に楽しかった体育祭を鮮明に思い出します。団は4学部混合で構成されており、優勝という一つの目標に向かって一丸となって協力しました。結果は3位で優勝には届きませんでした。仲間との絆や最高の思い出など何物にも代えられないものを得ることができました。今回の体育祭を通して大きく成長することができたと思身身実感しています。最高の体育祭を実施できたのは昭和大学の教職員の方々や学生の皆さんのおかげです。感謝の気持ちを常に忘れずに今後の寮生活も全力で楽しみます。ありがとうございました。

薬学部薬学科 有村 優希 (東京学芸大学附属国際中等教育学校出身)

コロナ対策部門長 体育祭・コロナ対策を通して

薬学部薬学科 笹井 愛子 (日本大学高校出身)

今年度の体育祭は6月26、27日に行われる予定だった寮察が、入寮後急遽スケジュール変更され行われたものでした。そのため、それまで想定していたコロナ対策とは大きく異なるものへの変更を余儀なくされました。今年度の体育祭で私はコロナ対策・食飯部門長を務めたが、その対策は、体育祭当日までのコロナ対策・食飯部門委員や体育祭部門委員の一人一人の努力によって成り立つことができたのだと考えます。

今回のコロナ対策案の作成を始めた最初の頃は、「絶対に一人も感染者を出さないよう、誰もが無事帰れるのを求めました。しかし、教員の方々や専門知識のある方々のあらゆる意見を頂きながら進めていくと、コロナウイルスに対峙するう

え「絶対」や「正解」はないのではないか、と確信を持つようになりました。そうした中、コロナ対策および食事販売を担ったこの部門での準備期間2ヶ月で感じたことがあります。コロナ禍によって半強制的に行われた「ニューノーマル」に適応していくためになされた、あらゆる人々の粘り強い努力をひしひしと感じたのです。例えば、富士吉田キャンパスでは感染症対策として給食方法や時間が大きく変わり、食堂の職員の方々の勤務形態や生活スタイルも今まではまるで違うものになりました。先生方や事務の方々、そのご家族、あらゆる方々の支えによって体育祭が実現し、これを無事に終えることができたことに深く感謝しております。

緑:カラー長 緑カラー長やってよかったー!

保健医療学部理学療法学科 森 雅基 (千葉県立木更津高等学校出身)

まずカラー長を務めさせていただいたからには、皆さんが本当に楽しんでもらうよう、自分が思い描いていた型通りの大学生キャラを捨て、盛り上げキャラに徹しました。恥を捨て、誠心誠意みんなを盛り上げる態度をしたことで、私のようなリーダーにもついてきてくれたのだと感じ、とても嬉しかったです。今回の体育祭はコロナ禍ということもあり、応援席ではマスクを着用し、大声での応援を防ぐため、スティッククレーンを利用して応援を行いました。こういった対策があったからこそ無事に体育祭を終えられたのだと感謝しています。

私は今回、カラー長という立場で体育祭の運営に携わりました。その甲斐もあり、体育祭は楽しかったといくさんの声が聞くことができ、とても嬉しい気持ちになりました。特に嬉しかったことは、これまでに言葉を交わしたことがない多くの学生たちと仲間になり、一緒に写真を撮ることができたことです。あの時の自分は、カラー長としてこの上ない優越感に浸っていました。胸に勝る喜びはこれから多分ない!とすら思えます。この日の思い出をしっかりと胸に刻んで日々精進していこうと思います。

青:カラー長 青が一番!

医学部医学科 荒田 智浩 (ラサール高校出身)

両男……私は自分をそう勘違いしていたため、体育祭の日だけ晴れたことは素直に喜びました(体育祭の前日はほぼ毎日雨でした)。もしかしたら、本当は晴れ男かもしれません。体育祭では、青組のカラー長を務めました。順位は最下位でしたが、青が一番でした。なぜなら、盛り上がり部門、団結力部門、他学部との交流部門、総じて点数にはならないものすべてが一番だったからです。頭着にそれが表れていたのは、「綱取り」のときです。みんなで自主的に作戦を立て、弱いところを助け合いながら戦いました。その結果、「綱取り」では一位をとりました。私は周りの良き仲間たちに支えられて青のカラー長として尽力することができました。改めて、みんなの前に立つことは周りのサポートがあってこそのことであると実感しました。一番のチームのカラー長ができて最高です。青組のみんなありがとう!最後に、感染対策を学生一人ひとりが気をつけることで、体育祭を無事に開催できたことに感謝しています。

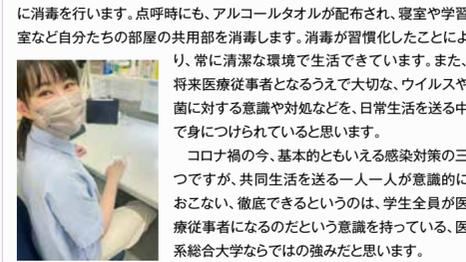
毎日の清掃 将来の医療人としての感染対策

薬学部薬学科 山名 卓月 (大分県明光高等学校出身)

寮生活では大きく分けて3つの感染対策を行いました。1つ目は消毒、2つ目は検温、3つ目は換気です。

寮の中では至る所に消毒用のアルコールタオル(ウェットティッシュ)や消毒液などが置いてあり、学生は誰でもいつでも消毒ができる環境が調えられています。共用部でのウイルスや菌の媒介を防ぐために、椅子や机、トイレ、ドアノブなど、多くの人が触れるところを重点的に消毒します。清掃を担当する専従の学生が決まっているわけではなく、学生全員が自発的に消毒を行います。点呼時にも、アルコールが配布され、寮室や学習室など自分たちの部屋の共用部を消毒します。消毒が習慣化したことにより、常に清潔な環境で生活できています。また、将来医療従事者となるうえで大切な、ウイルスや菌に対する意識や対処などを、日常生活を送る中で身につけられていると思います。

コロナ禍の今、基本的ともいえる感染対策の三つですが、共同生活を送る一人一人が意識的にこない、徹底できるというのは、学生全員が医療従事者になるのだという意識を持っている、医系総合大学ならではの強みだと思います。



食堂 コロナ禍における寮での食事のシステム

歯学部歯学科 小川 大貴 (城北高校出身)

新型コロナウイルスの影響によって七月上旬まで対面での食事を中止し、全学生を4つのグループに分け、それぞれグループごとに食事時間を定めて一定方向を向いたまま食事を行っていました。この時期までは学生のワクチン接種がおこなわれていなかったり、コロナウイルスに対する学生の意識が十分ではなかったりしたことなどから、まだまだ安全が保障されていない状況であったため、このような食事体制となっていたのだと思います。しかし、そのような懸念がある程度払しょくされたことから、七月下旬からは今まで通りの感染対策を講じたうえで対面での食事を開始し、決められた時間内であれば誰でも食事ができるようになりました。

こうした自由が生まれる一方、学生一人一人が感染症に対しての自覚をもたなければ、今年度の寮生活を成功させることは非常に難しいと思うので、自分自身も感染症への意識をより高めていきたいと思っています。食事の献立に関しては、栄養のバランスがしっかり考えられているだけでなく、味もおいしく、自分に合った量を選ぶことができます。私は食堂での食事をいつも楽しみにしています。

また、検温はしっかりと報告することが大切です。報告のフォームを期限内に確実に送ることが、医療の現場に欠かせない報告の練習になっていると感じています。さらに、私たちはきちんと感染予防に努めているのだと先生方に示すことも生まれます。検温ひとつとっても生まれるものがたくさんあります。これからもこのような日々の小さな積み重ねを大切にして過ごしていきたいと思っています。



入浴 富士吉田におけるお風呂事情

医学部医学科 黄野 博森 (木更津高等学校出身)

寮内での入浴は、感染対策の取り組みが徹底して行われています。具体的には、入寮後はしばらくは浴槽が使用できず、シャワーのみが許可されていたこと、ソーシャルディスタンスを保つため、ロッカーの一部を使用禁止にしていること、時間が予め決められ、ローテーションで浴室を利用することなどが挙げられます。このように様々な制限がありますが、中でも一人ひとりが規則を遵守して寮生活を送っています。

入寮してから1週間ほど後に行われた2回目のPCR検査で全員が陰性であることが確認されたこと、浴槽の使用が許可され、私たちは温泉に入れるようになりました。(寮の風呂はキャンパス内で湧出する温泉を使用しています。)広い浴槽で友達と湯につかり、その後食べるアイスは格別です。

学生全員の協力によって新型コロナウイルスの感染者が出ていないこと、ワクチン接種の実施から、私たちが寮生活は少しずつ自由になってきています。昭和大学の寮生活は、感染対策に気を付けながらも、友達と楽しく過ごせる日々なのです。



食堂前に開設された足湯でくつろぐ

検温 朝と夜の習慣

保健医療学部看護学科 鈴木 桜 (神奈川県立市ヶ尾高等学校出身)

「検温した〜?」これは、同部屋のメンバーとの朝の挨拶の次に出てくる言葉です。

私たちは毎日、朝と夜に検温をおこない、体温と体調をWeb上のGoogle Classroomにあるフォームに記入して、オンラインで報告します。

「検温をすること」イコール「ただ体温を測ること」、ではありません。検温は、ただ体温計が鳴るのをほっと待つ時間ではなく、自己と対峙する時間なのだとか教わりました。自分とじっくり向き合い、今日の調子はどうか?と自分に問いかけます。この時間を大切にすることで、しっかりと自分と向き合うことができます。

また、検温はしっかりと報告することが大切です。報告のフォームを期限内に確実に送ることが、医療の現場に欠かせない報告の練習になっていると感じています。さらに、私たちはきちんと感染予防に努めているのだと先生方に示すことも生まれます。

検温ひとつとっても生まれるものがたくさんあります。これからもこのような日々の小さな積み重ねを大切にして過ごしていきたいと思っています。



富士吉田教育部のCOVID-19対策

富士吉田教育部 学校医 教授 木村 聡

寮生活の狙いは、寝食を共にすることで他者を思いやる心を育てることにある。本学卒業生が「至誠一貫」の医療を実践し、患者の心情に寄り添う医療者として揺るぎない名声を得ている背景には、寮生活による人格形成の寄与とるところ誠に大と考えられる。しかし、どんなに仲の良い友人でも、24時間共同生活を何ヶ月も続けることは、それなりのストレスになり、精神的、身体的変調を起こす事例も散見される。コロナ禍で学んだ経験を後世に活かすべく、感染対策の概要と留意点を記すこととした。

- 寮生活の「三密」を避ける目的で、以下のような対策を実施した。
- COVID-19の感染予防に関する教職員向け勉強会（2回）。
- 感染対策に関する学生用教材の作成・講義。
- 入寮前に事務方と全寮を巡回、感染のハイリスク箇所を洗い出し、椅子の数や配置、換気方法を改善。
- 入寮直前と1～2週間後に全学生、教職員に鼻腔ぬぐい液でPCR検査を実施、陰性を確認し入寮許可。
- 教職員は学生入寮後も原則2週間おきにPCR検査。
- 寮生による外出の禁止。近隣のコンビニ、ディスカウントストア、飲食店も出入り禁止。
- 寮内では食事以外マスク着用、個人別に入出入り可能な部屋とフロアを制限。
- 毎日朝夕検温。寮監が平熱であることを確認。
- ご家族、友人など外部者の面会制限。
- 講義はおよそ半数の学生が教室、残りはオンラインで寮などで視聴。
- 外傷など専門医の診療が必要な場合は紹介先医療機関と密に連絡し、空いている時間を狙って受診。搬送は事務課で改装した特別車を使用。



PCR検体採取に向かう筆者(右)と事務課の神田洋輔さん。

入学式 緊張の入学式

保健医療学部理学療法学科 宇高 萌 (森村学園高等部出身)

4月9日から3日間にわたり分散入寮が行われ、約600名全員がPCR検査をクリアし無事入寮することができました。そして翌12日に、スクエアガーデンにおいて入学式および入寮式が挙行されました。私は新入生代表として壇上上がり「昭和大学宣言」を行いました。これは、ジュネーブ宣言と昭和大学の理念に基づき、昭和大学のすべての学生・職員のために定められたものです。例年であれば新入生全員で唱和するはずだったのですが、コロナ禍ということもあり、たった一人で宣言を行いました。とても緊張したと同時に、初対面ではあった仲間が大勢いるのだという心強さを背後から感じる事ができました。昭和大学宣言の中には「人類への貢献」、「まごころ」、「生涯」、「感謝」、「尊敬」、「敬愛」など、これまでに深く考えてこなかったような重みのある言葉がたくさん盛り込まれています。昭和大学生として、ここにいる仲間と共にこれから学んでいくのだという実感が湧いてきました。

入学から早4ヶ月、富士吉田の寮生活も半分が過ぎました。感染対策のための制約が多い中、私達の部屋では、毎日楽しく安心して寮生活を送ることができています。徹底した感染対策を講じてくださる富士吉田教育部の先生方、寮監先生、事務課、給食、清掃、生協の方々等、富士吉田校舎の皆様のご対応に感謝申し上げます。



昭和大学の医療と教育を支援するPCRセンター

昭和大学病院PCRセンター長 木内 祐二

昭和大学では、附属病院の発熱外来受診者の新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)への感染の有無を判定する目的で、令和2年5月に旗の台キャンパス1号館に学内PCRセンター(現在は、昭和大学病院PCRセンター)を開設しました。大学の強力な支援と、多くの教員の協力のもと、2週間程度の準備期間で設立できました。現在、PCR検査の対象を附属病院(大学病院、東病院、江東豊洲病院、歯科病院)の全入院予定患者のスクリーニング、4学部および看護専門学校学生の臨床実習前、1年生の富士吉田校舎入寮時、体調不良の病院スタッフ・教職員・学生などの検査まで広げ、本年7月末までに約64,000検体を検査し、1260件のSARS-CoV-2陽性検体を検出しています。



PCR検査を受ける富士吉田教育部長 PCR検査に従事する筆者(左)

変異より速く、ひとりのこらず、この災禍を超えてゆくこと

富士吉田教育部 講師 齋藤 範

僕らの共感の速度は、ウイルスが変異する速さには負けていないか。僕らの連帯の強度は、ウイルスが蔓延する強さに負けていないか。人類に対する挑戦は疫学上のことばかりではない。人と人、社会と社会、国と国。私たちの生きざまへの大いなる挑発だ。猛攻撃をしかけながら「人類よ、これしきで断断か」と、ウイルスは高みの見物である。

4月の入寮時、PCR検査の結果を待つ間、「STOP!感染者への誹謗中傷」というタイトルのもと、感染症の克服には「連帯の精神」が必要で、他者への「共感＝共苦」が肝要だと学生諸君に話した。彼らの努力により、感染も誹謗中傷もなく前期を終えられた。

広く社会に目を転じよう。連帯も共感も「ひとりのこらず」ということはありえない。いつも誰かが弾かれて、ひとりふたりとこぼれおちる。ウイルスはそこを狙っている。我らの小さな裂け目に楔を打ってくる。我ら人類という巨岩が

編集後記

通巻40号となる号は初めてとなる特集を組むこととなりました。題して「特集 新型コロナウイルス感染症対策」。本学の最大の特徴は、医・歯・薬・保健医療と4つの学部が揃った医系総合大学である点ですが、それと並ぶいわばアイデンティティとも言えるもうひとつの特徴が富士吉田キャンパスにおける初年次全寮制教育です。

しかし昨年、この第二の特徴が大きな試練にさらされることになりました。COVID-19によるパンデミックという危機です。特に本学の寮生活は学部混成による4人部屋という制度を基盤としているだけに、ひとたびウイルスの侵入を許すと一気に寮内にクラスターが、しかも同時に複数個所で発生する危険性がきわめて高いと考えられます。そのため、昨年度は前期の寮生活を断念し、後期の二箇月間だけの入寮とせざるをえませんでした。しかしそこで、より例年に近い全寮制寮生活を実現するためのヒントもいくつか得られることとなりました。

コロナ禍での二度目の全寮制生活となる今年度は、自宅での遠隔授業期間と

本年3月以降は、陽性検体の変異株(アルファ株、デルタ株など)判定も行っています。月～土の午前・午後の2回、1日平均200検体を検査し、同日中に結果を判定、通知します。多くの検査を円滑に実施するため、医・歯・薬学部などの主に基礎系教員(現在まで80名以上)が積極的にボランティアとして協力しています。「このコロナ禍で迫迫している医療や社会、学生教育の役に立てれば」という「至誠一貫」に基づく高い意識と、日頃、培った知識と技術を用いて、チームでPCR検査を実施し、迅速に精度の高い結果を出しています。

これからも、本学ならではの「オール昭和」の体制で、附属病院の医療とともに、安全・安心な大学教育と1年生の爽り多く楽しい寮生活を支えていきたいと思っています。



PCR検査を受ける筆者

富士吉田教育部 講師 齋藤 範

自らの憎悪と不寛容という自重でもって瓦解するのを待っている。断断の種も変異する。ワクチン接種できない者への無理解や偏見、接種の順番や種類をめぐる混乱。収入の変化による浮き沈みと冬の格差への無関心、感染リスクの意識の違いによる罵り合い。地域や世代、立場や考え方の違いに、ウイルスはさらなる断断をけしかける。

連帯し共感し合える人々々はそれでよい。問題はその先だ。異なる思いや境遇をどう認め合い、互いに自らどう変身し、互いに互いをどう包み合って「ともに生きてゆけるか」だ。日々の振る舞いを自らの無自覚の加害性も含めて省みて、それでも正しいと思えるところに向かっていなら、心をつないで離さずにいよう。

いつかまたマスクなしで、夏の匂いをかごうじやないか。ひとりひとりの挑戦が、僕らの明日をつくってゆく。

広報誌委員長 教授 田中 周一

して設定した前期のうちの三週間を含め、ひとりの感染者も出さず全寮制教育を実現することができました。今号の特集内容は、その実現の基盤となった各種の試みと、そうしたなかでの学生たちの奮闘と多数の記事として紹介するものです。

この広報誌を手にした皆さま、在学生はもとより、保護者の皆さま、来年度の入学受験を検討なさっている受験生の皆さま、将来の昭和大学生となる若者たちの保護者の皆さま、さらには本学と同じ寮制度を導入している他大学の皆さまに、本学全体が一丸となって感染症に向き合う姿勢をご紹介することで、困難な状況下でも全寮制教育を維持できるといふ事実と安心とを提供できますことを願っております。



PCR検査を受ける筆者



「御坂峠より」富士吉田教育部 前田昌子准教授 撮影

特集 新型コロナウイルス感染症対策

新型コロナウイルス感染症拡大下での初年次全寮制教育の維持

昭和大学 富士吉田教育部長 倉田 知光



令和2年1月、いつも通りに後期定期試験を終えた学生を送り出し、次年度の学生受け入れの準備を始めようとした2月下旬、富士吉田キャンパスに激震が走りました。新型コロナウイルス感染症の世界的拡大のニュースでした。まさか、1か月もしないうちにここまで拡大、危機的状況になるとは全く予想もしませんでした。本学で55年の歴史をもつ学部混合全寮制制度の実施に赤信号が灯りました。学生の生命の保護を最優先するためにはやむを得ない判断でしたが、入寮準備態勢の整備、感染制御資源の確保ができるまでは、令和2年度の入寮は無期延期となりました。寮内に未知のウイルスが少しでも紛れ込めば一気に感染拡大、クラスターが発生する事は、10年前の新型インフルエンザの際に既に経済済みであり、全寮制制度の中の感染症の蔓延が、一般社会に比べてそれほど恐ろしいかは誰よりも理解しておりました。ましてや、治療薬や治療方法も分かっていない、未知のウイルスとの闘いです。学生の学修の確保と学生の命を守るという二律背反の状況をどう打破するか、決め手は見つかりませんでした。唯一現状でできることは、全寮制を維持するためには、「ウイルスに触れない、入れない、増やさない」の条件を作り出すほかはありませんでした。そのため大きな後押しになったのが、6月に、全国に先立って本学が学内を設置した「新型コロナウイルス対策PCRセンター」のご支援でした。すべての学生にPCR検査を実施し、ウイルス検査の陰性を確認した直後、一般社会との接触を一切避けた状態で入寮し、ハブ下での管理を行うという、無謀なものでした。

計画の開始から2か月、8月末に、毎日200名ずつ3日間にわたって、旗の台キャンパスでPCR検査を行い、そのまま、チャーターバスに乗せ入寮、2週間の完全隔離状態の中で再度全員にPCR検査を実施し、キャンパス内にコロナウイルスが全く検出されない「コートピアの構築」を実現しました。外界との遮断という厳しい条件下ではありましたが、通常の状況に近い状態での対面授業、実習を実現させました。その間、学内に入出入りする教育職員、その他の職員は2週間に1度のPCR検査の実施、旗の台キャンパスや横浜キャンパスから授業のために来校する教育職員は直近1週間以内のPCR検査の実施、検温、行動記録の徹底を行ったうえで、方が一のウイルスの侵入時にすぐに対応できる準備を徹底したうえで対面授業を実施しました。学生たちは、キャンパス内からの外出、外泊を我慢し、やむを得ない理由で外泊等を行った場合には、PCR検査を実施した上で、学内の別棟での隔離を一定期間行い、感染していないことを確認した上で再度入寮といった、徹底した管理を行いました。この体制は、大学生としてのキャンパスライフを実現するために必要な管理であり、修学の質を担保するためにはやむを得なかったことと思いますが、学生にとっては、他大学との比較とはなりますが、「大学生らしいキャンパスライフを体験できた」と高い評価を得られました。一方で、限られた範囲内での行動を強いられることに対する精神的負担を感じる学生も時の経過と共に増え、結果的に2か月をもって、全寮制から、在宅学修に変更することとなりました。しかし、少なくともこの2か月の全寮制制度の中で感染者ゼロの達成は学生の協力、職員の献身的なサポートの賜物であると考えます。

この経験、実績がもととなり令和3年度は緊急事態宣言が各地で発出されている中でも、全寮制を維持し、これまでの全寮制とはほぼ同様に4月から学事予定通り、大学生としての修学、本学の全寮制制度を途切らさず実施できています。一般常識からすると無謀ともいえる全寮制の維持、これには極めて多くの方々の献身的なご支援を頂いたのでからこそ可能となったこと深く認識しています。ご支援を頂いている皆様にはこの場をお借りして、心より深く御礼申し上げます。

広報誌名物について
全寮制を特徴とする富士吉田校舎学生寮は「白樺寮(男子寮)」「百合寮(女子寮)」の二寮からスタートしました。「赤松寮」「すみれ寮」を加えて四寮となった現在も、白樺・百合という名称は受け継がれています。この名を冠した「白樺・百合」という広報誌の名称には、過去・現在・未来の学生たちが日ごと成長をどうして前進しつつも、常に初心を忘れず、伝統を受け継いでいくことへの願いが込められています。

学生部長 学生生活とコロナ

富士吉田教育部 学生部長 教授 堀川 浩之

コロナは我々の生活を劇的に変化させた、普通の生活のありがたみを感じています。私自身も昨年「Go to Eat キャンペーン山梨」の食事券を16,000円購入したものの、使用する機会は全く、全てを無駄にしました。

学生生活にも大きな変化をもたらし、昨年から活動中止となっているクラブ活動は度々再開されましたが、緊急事態宣言が発出され、再び活動中止状態となっています。また、各種の大会も昨年より東医体やオールデンタルなどが中止となりました。先輩諸君の落胆はどれほどのものだったのでしょうか、同情を禁じません。寮生活が横の人間関係をつなくものであれば、クラブ活動は縦の人間関係をつなくものとして大切なものです。富士吉田において本来は入学直後に行われる新入生歓迎会を中止せざるをえませんでした。1年生に関しては外出を制限していることから、サークル活動として自主的な活動を容認していますが、これは1年生だけの活動です。7月には各クラブの紹介ポスターを富士吉田校舎1号館2階廊下に掲示しました。今後も先輩たちと対面での交流ができるよう、学生部長会では条件を整えていきたいと思っています。

さらに寮祭・体育祭と寮内でのイベントの数々もコロナの影響で学生の皆さんには不自由をかけていますが、横の人間関係を強くするためにこれまで普通に行っていたものをなんとか実施していきたいと思っています。皆さんのご協力のほどよろしくお願いたします。

教育委員長 新型コロナウイルス感染症と学修環境

富士吉田教育部 教育委員長 教授 小倉 浩

新型コロナ感染症による学修環境に対する影響は大きなものがあります。例えば、密を避けるために、本来使用してきた教室とは異なる、より大きな教室で授業を実施せざるを得ないこととなり、これによりたえば板書やスライドが見えにくくなるなどの問題が発生しました。

また、遠隔授業と対面授業を併用する教育課程も、新型コロナ感染症による影響を受けなかった他の年度と著しく異なっている点です。遠隔授業は、自分のペースで学習できるなど良い点も多ありますが、一方で、学修ペースがつかめぬ、一人でPCを長時間見続けて学修することによるストレスが発生するなど、負荷が大きくなる面もあります。こうした悪影響をできるだけ軽減するため、学生アンケートによる問題点抽出や、各学部・学科の学生教育委員の協力による遠隔授業受講の問題点の調査を実施しました。抽出された個々の問題点に対しては、有効な対応策が明らかになった段階で、対応策へのご協力を各先生にその都度お願いしました。

このように、事前に予測がつかない問題に対して、問題が発生する都度その対策を考えざるを得ないのですが、その一つ一つの調査によって、影響をできるだけ軽微なものとし、さらにこうした問題の解決を図ることを通じて、逆に、より学修環境を充実させることを念頭に置いています。

寮運営委員長 感染予防を意識した集団生活の実行

富士吉田教育部 寮運営委員長 准教授 萩原 康夫

令和2年4月の富士吉田キャンパスには桜が綺麗に咲いたものの、学生の声は一切ない寂しいキャンパスでした。しかし、今年4月の富士吉田キャンパスは例年のように学生たちの声が明るく響いた賑やかなキャンパスとなりました。もちろん、コロナウイルス感染症は収束した訳ではないのですが、昨年度の学生達の寮生活(9月と10月の2ヶ月のみでしたが、一人の感染者も出ませんでした)での経験を踏まえ、今年度は4月より入寮することに決定したのです。

昨年同様に、学生たちにはキャンパスからの外出や外泊を自衛してもらうだけでなく、風呂場やラウンジなどの利用に関しても時間制や人数制限などを実施してもらうなどの不便を背負ってもらいました。さらに、寮内の至る所に手指消毒用のアルコールを入れたディスペンサーや使用する物品などを清拭する除菌用クロスを設置して、常に衛生管理の励行を徹底してもらったのです。

それぞれの学生達が感染予防を意識した生活を通じたことにより、4つのすべての寮において一人も感染者が出ることなく前期を終え、夏休みを迎えることができました。ただ、学生たちには、かなりの精神的な負担をかけてしまったものと思います。後期の寮生活は、しっかりと感染予防を踏まえたうえで、精神的負担をできるだけ軽減するようにした形を学生達と協議しながら構築していきたいと思っています。

